

## 北海道南西部におけるサクラマスの資源動向について

### 〇はじめに

サクラマス（図1）は北海道南西部（後志・檜山・渡島地方）において春の主要な漁業対象種です。1980年代には北海道のサクラマス漁獲量の7～8割が北海道南西部で漁獲されていましたが、近年は2～4割程度に減少し、当該地域のうち、特に日本海側において資源の減少が懸念されてきました（図2）。



図1 「イタマス」と呼ばれる市場価値の高い大型のサクラマス

### 〇増えているのか？減っているのか？資源動向を把握するためには

一般的に魚類の資源動向の評価には、漁獲努力量当たりの漁獲量（CPUE）が用いられ、漁獲努力量には漁業者数、漁具の数、漁網の面積等が用いられます。定置網の漁獲努力量の年変化は比較的小さいため、定置網主体の漁業対象種は漁獲量で資源動向を評価できる場合もありますが、サクラマスは漁獲努力量の変化が大きい釣り漁業も主要な漁法であるため、中長期的な資源動向が今まで把握できていませんでした。

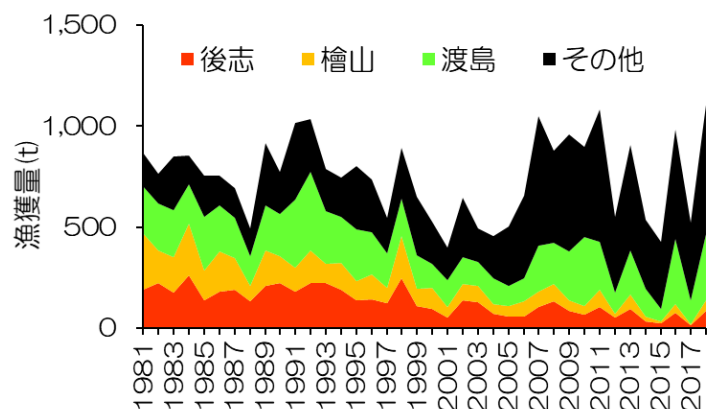


図2 北海道におけるサクラマスの沿岸漁獲量

### 〇サクラマスの詳細な漁獲データを収集した

サクラマスの来遊資源動向を把握することを目的として、北海道南西部の主要な漁業協同組合にご協力頂き、近年の詳細な漁獲データ（いつ・どの漁業者が・どの漁法で・何尾のサクラマスを漁獲したか）を収集しました。各年の漁期中にサクラマスを1尾以上漁獲した漁業者の数を漁獲努力量としたところ、主要な漁法である釣り漁業において、漁獲努力量が漁獲尾数に強く影響することがわかりました（図3）。

### 〇漁獲尾数と漁獲努力量から資源動向を推定した

地方別（後志・渡島地方は漁業協同組合別、檜山地方は漁業協同組合支所別）の漁獲尾数と漁獲努力量を用いて、CPUEの年変動傾向（標準化CPUE）を計算することにより資源動向を推定しました（図4）。その結果、近年においては資源動向に明瞭な増減傾向は認められませんでした。

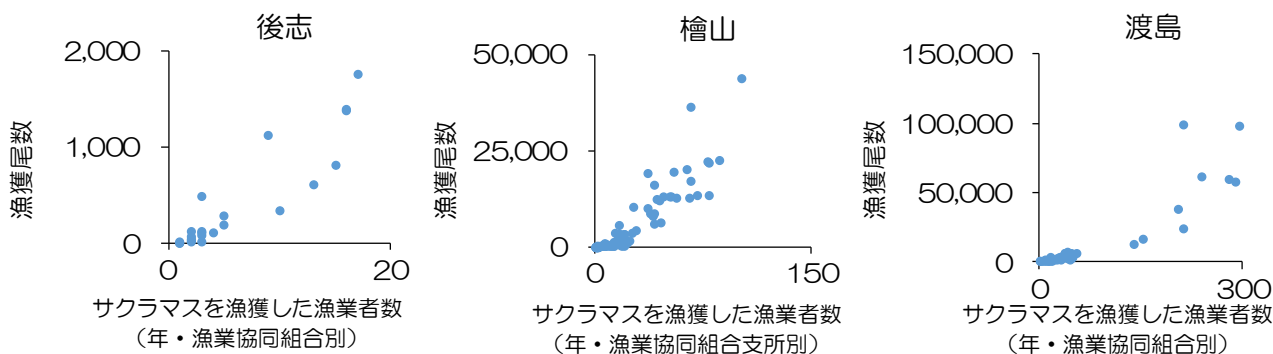


図3 釣り漁業における年・漁業協同組合（支所）別の漁業者数と漁獲尾数

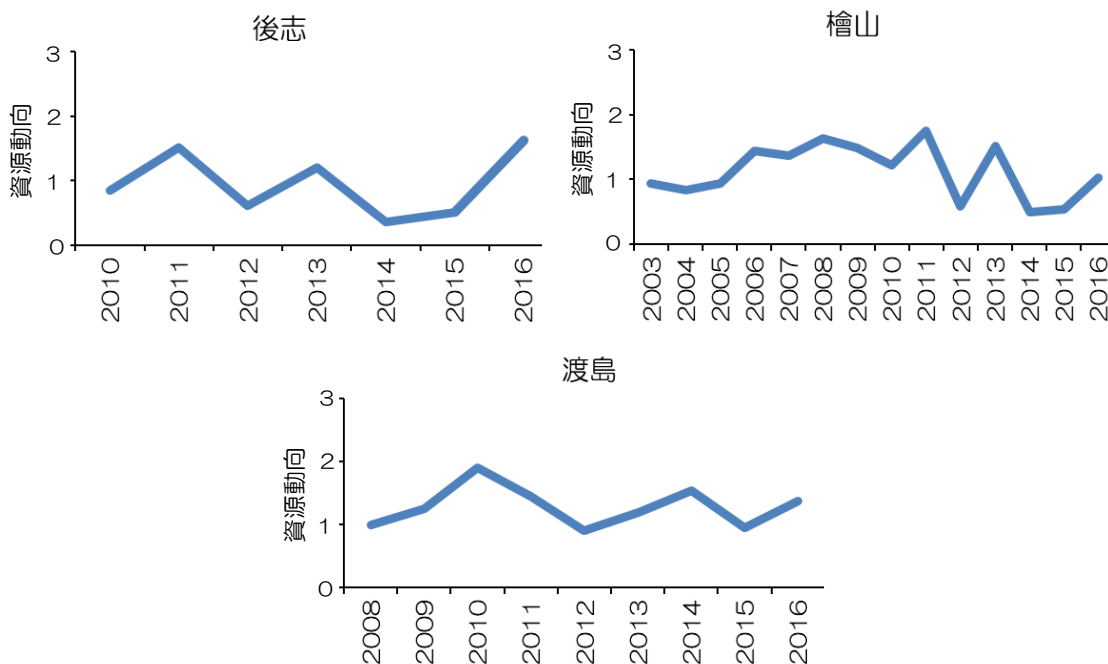


図4 推定したサクラマスの資源動向（標準化 CPUE）

## 〇おわりに

サクラマスにおいて漁獲努力量を考慮した推定方法を用いることにより、来遊資源の動向を正しく理解することができるようになりました。このような手法により地域の資源動向を把握した上で、種苗放流や河川環境の整備の実施等、サクラマス資源の増加を促す取り組みを適切な規模で行うことが、サクラマス資源を持続的に利用するために必要であると考えられます。

最後に、本研究を実施するにあたり後志、檜山、渡島地方の漁業協同組合の関係者様におかれましては、データ収集において多大なご協力を頂きました。ここに御礼申し上げます。